

群。学生たちは目を輝かせ、急ぎ足に行き来していた。

昔の家の前で無邪気に騒ぐ子供たちを見ながら、私はこんな変化が何故生じたのか、やっと気がついた。昔、お手伝いのテイサンは子沢山で貧しく、夜更けに我が家の残り湯をもらいに来ていた。食糧や焚物も分けてあげて、私たちは「親切な日本人」のつもりだった。だが、食糧や残り湯をもらわなければ生きられない生活が楽しかったはずはない。

明治維新で苦しんだ祖父たち。敗戦を乗り越えた父母たち。私や弟は幸いにも何事もなかったように生き続け、子を育てることができた。

私は子供たちが中学生になったころから家庭裁判所の調停委員などをして、少し社会と関わって七十六歳の現在、まだ健康である。普通の暮らしは何物にも代えがたいと思う。

引揚者の方々と違うのです。次兄は私が中学に入学した年に、母の姓大林家を名乗りましたが、長兄と相談して家を飛び出し船乗りになり、輸送船に乗って戦場に行き、戦死してしまいました。長兄も輸送船に乗っていましたが、恐ろしい体験もしないで終戦を迎え、アメリカから借り受けた貨物船リバティに乗船し、外地から引揚者の輸送にあたっていたのです。その船に乗り合わせた私たち一家が奇跡的に長兄とめぐり会い、船員仲間の温かい友情によって人間らしい姿に戻れました。

戦後の咸興では多くの日本人が家を追われ、苦しんでいたとは知らずに朝鮮人の子供たちと遊ぶふけて、楽しく暮らしていました。母の家出さなければ、幸せで何一つとして不自由な生活はせず、今になっても苦労した多くの人たちに申しわけないと思う気持ちでいっぱいです。北朝鮮から南朝鮮に着くときに、追剥に遭って所持品を根こそぎ剥奪されたことは、咸興における生活の罰が当たったのだと思っています。また、着ていた

外地となった故郷

神奈川県 安田善吉

はじめに

朝鮮半島の北緯四十度に位置する日本海に面したところに咸興がある。咸鏡南道道庁の所在地で、朝鮮軍第七十四連隊を標高三百メートルの盤龍山麓に持つ軍都でもあった。また李王朝発祥の地で、川幅四百八十メートルの勇壮な姿を見せて悠々と流れ、日本海に注いでいる城川江が素晴らしい。

この川には、北朝鮮一長い五百メートルにも達するコンクリート造りの立派な万歳橋が架けられていた。

市内の大和町で、昭和六（一九三一）年五月に楽器販売業を営んでいた安田家の、六人兄弟の三男として産声をあげたのが、この手記を書いている私本人である。戦後の咸興で不自由のない生活と、引揚げで北から南へと歩いた状況が、多くの

衣服が長い逃避行でぼろぼろになって、同情した船員仲間が小遣いを出し合ってお金をつくり、手持ちの衣服や食糧を援助してくれたお陰で、難を凌げたと感謝しています。

援助された物を持って帰郷先の大阪に帰りましたが、初めて見る大阪では、咸興にない電車や人の多いことに驚きと戸惑いで、咸興で生まれ育った私には想像もできなかったひどいことでした。

大阪で浮浪生活をしているときに、父の旧知の人に助けられたのは、父の人徳のお陰であったと後になって感じました。

一 戦時中の咸興

昭和十六年、太平洋戦争が始まった年は、小学校四年生で十歳でした。神国日本は戦争には絶対負けない、最終的には神風が吹いて世界を統治してくれると、子供心にも信じていました。

大本営発表による連戦連勝の報道も神国日本を信じる一つで、小学校二年間は勝利に喜んで不安もなく通学していたが、中学校に進むと毎日の授

業や生活様式が一変して、学生の本分である学習がなくなり、体力作りに明け暮れて軍隊を真似た教育が主体となり、上級生は下級生を見ると理由もなく制裁を加えて自己満足をしていた。松根掘り、軍需工場への動員、防空壕掘り、グライダー訓練、食糧作り等々で、机の前に座ることがなかった。しかし結果は、信じていた神風は吹かずに戦争に負けてしまった。

二 戦後の咸興

戦中の中学校では一年生に入学すると、必ず上級の人から殴られるのが日課となっていたが、戦争終結で殴られる心配がなくなり、正直に言って嬉しかった。十三歳から十四歳の成長期に殴られていたのが影響したのか、青年になっても一六三センチメートルという小柄な身体であった。

神様と信じていた天皇陛下が、ラジオの電波で戦争終結の詔書を肉声で述べられたときは、ものすごいショックであった。

天皇陛下のお言葉を聞いた七、八日後には、ソ

町の合流地点の交差点で解散していた。朝鮮語はあまり理解しないが日本語風にでたらめに覚えていたのが、「トンヘルマルガ ベッサニマルゴタ トニ ヘナニミル コータトウリナランマセ」である。歌詞の意味は分からないが、自分流に解釈して覚えた最初の朝鮮語の歌で、強烈に脳裏の底に染み付いている。

解散後、血気にはやる一部の若者たちが、かつて日本人に痛めつけられた敵討ちとばかりに日本人住宅を襲い、うっ憤を晴らしていた。私の中学の教師も、生徒たちが日本に帰って、すぐに学校に転入できるようにと、在学証明書を生徒宅に配布中に、騒ぎに巻き込まれて暴徒に叩き殺された訃報を耳にしたのも、このときであった。

我が家は幸いに現地人の標的から免れて、最後まで居住できたことは、気の毒な人たちには誠に申しわけないが助かった。

ソ連軍が咸興市内に進駐すると、そのような騒ぎはなくなり、以前と同じような静かな街に戻つ

た。連軍が無抵抗な日本人がいる咸興に、怒涛の如くに突入してきた。それと同時に満州や鮮満国境の町々から追われた日本人が、侵入してきたソ連兵に付きまとうようにして雪崩込んできた。リュックサックを背負い、子供を肩車にしてそのリュックサックの上に乗せた人、両手に荷物を持っている女の、着の身着のまま逃げた人、子供や年寄り（いとこ）を背負い（いた）らしている人など、いろいろな人たちが追われてきた。ニュース映画で見た中国の人たちが、日本軍に追われている場面と全く同じであった。戦争の勝者と敗者の差が、体験して初めてわかった。

学校の校舎、会社の倉庫、大きな家などに気の毒な人たちを収容して、一応市内の混乱は免れたが、我が家でも二組の家族を収容した。

終戦から三日目ぐらいから、「螢の光」と同じ曲の朝鮮国歌と思われる歌を歌いながら、徒党を組んだ現地人が朝鮮国旗を手に手にして、軍営通りを公会堂の方面から行進してきては、大和町と本

たが、マンドリンのような形をした自動小銃を構えて、町中を警備しているソ連兵のなかには、赤鬼のような青い目をして、怖さを全身にみながらせていた兵士がいた。

また、日本の将校が腰に吊るしていた日本刀を武装解除で接收した現地人が、日本軍と同様な姿で、その日本刀を吊るして日本の警察のような保安隊を組織して、治安にあたるようになった。

朝鮮銀行券は使用できなくなり、ソ連軍が発行した軍票（赤札と日本人は言っていた）でなければ以前は日本国内では通用できず、内地に行くときには日本銀行に行つて両替をしなければならなかった。この朝鮮銀行券をたくさん持っていた人は、紙屑を持っていたようなもので、大きな打撃を受けていた。

八月十五日を境に現地人と日本人の立場が逆転したが、一部の現地人を除いては決して敗戦国日本人をいじめたり、苦しめたりはしなかった。現

地人同士の中でも親日派が同じ同胞にいじめられても、日本人を虐待するような素振りは一切見せず、日本人の帰国を耐え忍んで待つていたようだった。

このように敗戦の傷跡はあまりにも大きく、現地人同士の間が多いようで、日本人が引き揚げたあとでの利権争いが大変ではなかったかと思われる。

北の方から避難してきた同胞は、真夏の暑いときはまだ良かったが、零下二十度を超す厳寒の寒さの中、凍死と栄養失調と、虱しらみによる伝染病の発生には勝てずに、夢にまで見ていた日本への帰国ができずに、次々と死んでいった。その数は、咸興だけでも六千人にのぼるということをあとで知った。

私は菰こもで巻いた遺体の片付けに動員されて、盤龍山の中腹に塹壕のような長い穴を掘りに行かされた。穴掘りが終わると大八車にその遺体を積み込んで、素材ゴミを捨てるような乱暴な仕事で、

ドリル銃の台座でぶち壊して、侵入してきたことがあった。あまりにも派手な（到来であったので、母はいち早く気がついて、裏口から逃げて難を避けたが、逃げ遅れた二階の人たちは、主人が銃の台座で殴り飛ばされて気絶している間に、夫人が子供の前で欲望を果たされていた。戦争に負けた無抵抗な人間が、勝者の暴力に屈し、惨めさを思い知らされた場面だった。二階の家族の一組は、夫人が強姦されたことにより夫婦仲が悪くなり、家族が離散してしまった。もう一組は強姦された夫人が気違いのごとくになり、町を夢遊病者のようになつて、「丘にはためく、あの日の丸を 仰ぎ眺めるわれらの瞳 つかあふるる感謝の涙 燃えてくるくる心の炎 我等みんな力の限り勝利の日まで 勝利の日まで」と、幼い子供の手を引いて歌いながらさまよっているのを見かけたが、本当に気の毒で慰めの言葉もない有様だった。しばらくすると、我が家の二階からいつの間にか姿が見えなくなっていた。

掘った穴に放り込んで埋めていた。厳冬のために、遺体はちんこちに凍結していたので処理はしやすかったが、仏様にとつてはさぞ迷惑であったことと、今ごろになつて冥福をお祈りしているが、生きた心地がしなかった。「自分が掘った穴に明日は自分が放り込まれるのではないだろうか！」とだれしもが口にした、思いながら作業をしていたのだろう。運悪く予言が当たり、自分の掘った穴に放り込まれた不運な人もたくさんいた。

進駐してきた第一陣のソ連兵は、うわさによると本国で悪いことをして監獄に入っていた向こう見ずの命知らずの兵隊だから、無学で何も知らない野蛮人に等しいと言われていた。そのような兵隊が多かった先遣隊は、「マダム、ダバイ、マダム、ダバイ」と日本人住宅に侵入して、居合わせた主婦や娘、女であれば老人を除いて手当たり次第に例のマンドリン銃を突きつけて、主人の前でも子供の前でもお構いなしに強姦していた。

我が家にも、一度だけ店の分厚いガラスをマン同じことが我が家でも起きてしまった。母は隣近所の知人が興南港（西湖津）から閘船を雇って咸興を脱出しているのを、見たり聞いたりして知っていたので、父にことあるごとに閘船を雇って内地に帰る話をしていた。父は「騙されてお金を取られるだけだ！」と言って母の言葉には耳を傾けなかった。そんなときソ連兵が我が家に侵入して、二階の夫人たちが乱暴狼籍をされたことに肝を冷やしていた母は、閘船で帰る実力行使に出ってしまったのだ。足手まといの子供たちを置いて、単独で閘船を雇って内地に帰ってしまった母の心境は察したが、当時の幼い兄弟が母を慕って毎日泣き叫ぶ声を聞いて、私も恨み心でいっぱいだった。ソ連兵の乱暴で、気が触れた人や家庭内に亀裂が入った有様を見た母なりの判断ではあったが、子供を捨てた母を恨み許せなかった。内地に帰ってから、母のない子供は偏見の目で見られ、大会社に就職ができない大きなハンディになったことでもあった。

父は昭和三十六年一月に死亡したが、それまでは母がどこかで生きていると信じて、母の戸籍を残していた。しかし父が死亡したからには、いつまでも戸籍を残していれば、後々面倒なことが起こったときに困ると、子供たちが相談をして、昭和三十八年三月に生死不明として母の失踪届を家庭裁判所に提出して戸籍から抹消してしまった。それまでもただ手をこまねいていた十八年間ではなく、お金ができるかと母を尋ねて四国、九州、中国地方を探し求めて歩いたものだった。子供として、なすべきことはやり通したと裁判所も認めた結果の抹消だった。それが皮肉なもので、抹消五カ月後の八月に以前尋ね歩いた四国から、母が先祖の墓参りに現れたとの報せが入り、母の生存が確認され戸籍が復帰したという、ややこしい経緯が戸籍上に残っている。

いずれにせよ、母が家出をした一カ月ぐらいは、幼い妹が母を慕って連日泣き通しで、煩わしい日が続いた。

を雇って南朝鮮に渡っていた。

ちようどその日はうらかな気候で、天高く雲一つない絶好の凧揚げ日和であった。終戦後半年以上も過ぎていたが、そのころの朝鮮人の子供たちは、日本人の子供と差別がなく仲良く日本語を使つて遊んでくれた。チャギ、メツテキ、パッチン、ビー玉などの遊びであったが、その日は凧揚げが最適であった。家の前が空き地なので、近くの子供たちの遊び場になっていて、朝から弟や妹を連れて遊んでいた。後日聞いたことだが、終戦後日本人の子供が現地人の子供と一緒にあって、呑気に楽しく遊んだことは、他の日本人の子供にはなかったことだと聞いて驚いた。凧を天高く小さくなるまで揚げて、相手の凧を妨害しようとして糸に絡ませて空中戦をするのが凧揚げの妙味で、だれの凧だかわからないが、朝鮮語で「ナカンダ！ ナカンダ！」と、声を出しながら魚釣りのように、糸の根元を手繰りながら、糸を絡ませるの糸切戦である。糸を引く間合いによって引き方が悪いほ

年が変わり雪が溶け、野山に草木が芽を出して、桜の花も日本人が敗戦によって苦しんでいるのをあざ笑うように咲き始めると、ソ連軍が引揚列車を編成してくれるという報せを待ち切れない人たちが、続々と咸興の町を歩いて南に向かって出て行った。無謀な行進で半数以上の人たちが、のちに私たち家族が体験をして味わったように行き倒れになったり、ソ連軍に捕えられたりして、近くの収容所に入れられたようだ。

父は何を考えているのか知らないが、重い腰を上げず、五月、六月と過ぎ去っていた。戦争中には隣組の役員を引き受けなかった父が、戦後になって引き受けていた。「馬鹿な人だ」と陰口をたたかれ、さらに母にまで逃げられても反省の色はなく、家の中も無茶苦茶になっていたが、役員を辞めようとはしないで他人のことに熱中していた。

母の家出も、隣組の役員を引き受けたことが原因の一つであったようだが、要領の良い人や先見の明のある人は、隣組の役員を断つて早々と闇船うが「ブツン」と切られ、切られた糸と共に凧が上空の風に流されてどこかに消えていく。弟は「内地まで飛んでいけ」と叫んでいた。

母がいない我が家では、父が外で起きたことを家に帰っても、子供たちにはひと言もしやべらず、自分の胸のうちにしまい込んでいたために、子供は終戦後の日本がどうなっているか全く知らず、まるで隔離されたような状態であった。父の頑固な性格を知っている私は、あえて聞こうともしないので、父任せでなるようになれという気持ちが強くなり、現地人の子供たちと遊び始めたのだ。

朝鮮語が通じないので、少しでも朝鮮語を覚えたいという気持ちもあつたが、逆に現地人が日本語で話してくれるので、覚えることができなかつた。凧を揚げながら、街の雰囲気や普段の日と違って騒々しいことに気がついた。「今日は馬鹿に大きな荷物を背負った人たちが、子供を連れて駅の方に大勢行くが、なんだらう？」と思いつながらも凧揚げに夢中になって夕方になると、今度は家

の周辺が騒々しくなり、現地人で埋まるような人だかりになった。父がどこから帰ってくると、「さあ、わしらも行くか！ 表は大変な人だからや」と変なことを言い出して、かねてから家を出るときのために準備していたリュックサックや手荷物を裏口に運び出した。母のいない後の家事は祖母が引き受けていたので、父と祖母は話が通じ合っていたのか、「握り御飯をたんと食べておくんやで！」と言って釜の蓋や皿に大盛にして出した。家の中の様子も朝からなんだか違っておかしいなど思いながら、握り飯を腹いっぱい詰めて込み周りを見ると、別に竹皮に包まれた握り飯が五包も横に並んでいる。父も握り飯を頬張りながら、落ちつきなく時計をちらちら見ている、忙しそうに家中を歩き回っていたが、観念したように、「そんなら行くかや。今に大変なことになるで」と言うと、祖母をいたわりながら裏口に向かった。裏口には牛車が止まっていた、すでに父が運んだ荷物が積み込まれていた。

りで、夏は川遊びをした楽しい日々が思い出された。緊張している上に、横揺れの激しい牛車に乗せられていたこともあって、一睡もできずに長い時間をただ車輪の動く音だけを耳にしながら朝を迎えた。後に「地獄の富坪」と言われたほど、咸興・平壤に次いで死亡者を出した富坪を過ぎて永興に着いたのが、翌日の十時過ぎだった。永興には朝鮮石油の工場や陸軍の部隊などがあって、日本軍にとっては重要な地であったが、日本軍に代わったソ連軍も厳重な警備体制を敷いて警戒も厳しいようだった。

太陽が昇っている明るい日中は避けて、暗くなるまで待とうという馭者の言葉に従って、馭者の妹が嫁にきている家の冷たいオンドルの部屋で、前夜の疲れをいやした。陽が落ちて辺りが薄暗くなると、「永年懇意にしていたあなたとも今日で最後になる。今度いつ会えるか分からない」といってご馳走してくれた。馭者の妹婿の家でも、他人の家には変わらないが、我が家のような振る舞

父が朝鮮に来て以来、幾十年も付き合っていた農家の人が、私たちが咸興を脱出するため好意的に出してくれた牛車だった。

私たちが父の指示に従って荷車の上に乗り込むと同時に、家の中が騒然とした。表で待機していた群衆が、我が家へ乗り込んで家財道具や金目の物の取り合いが始まったのだ。父が「今に大変なことになるで」と言ったことが分かったが、不思議なことは私たちが家を出た瞬間が、どうして彼らに分かったのかであった。父は断腸の思いであったらうと思うだけで、子供の私には何もできなかった。

三 北から南へ

生まれ育った家を簡単に放棄し、二度と帰って来れなくなった私たちは、頭の上から藁をかぶされて大和町から軍営通りに出て、道立病院前を通って万歳橋に出た。橋の上を牛車が進んでいる音は聞こえるが、最後の咸興を見ることができなかった。長い万歳橋を渡る時は、冬はスケートやそいで、食べ切れないたくさんのご馳走が並べられていた。

父はよく朝鮮料理を食べていたようで手つきが良かったが、私たち子供は初めてで、ご馳走が山のように食卓に盛られているのに驚き、食べ方が分からずにまごついていた。今でいうバイキング方式で、自分の好みの料理を小皿にとって食べればよいのだが、すでにこの時代から、朝鮮ではバイキング方式の食事が取り入れられていたのだ。

最高の料理を腹いっぱいにご馳走になったあとは、前夜と同じように牛車に乗って、藁を頭の上からかぶされ、農家の人たちに送られて出発した。二日目の夜は満腹と前夜の旅で牛車の上にも馴れたのか、朝方まで車輪の回転音を聞きながら寝込んでしまった。

明け方に元山に着いたが、元山は南朝鮮の釜山に次いで開港した古い港町である。日本の陸海軍の航空隊があった軍都で、終戦間際には予科練に

入隊した隊員が霞が浦には行かず、この元山で訓練をしていた。

検問所が町の入り口にあった。元山にくるまでも多くの検問所があったが、脇道にそれたり回り道をして検問所を避けてきたが、この元山だけは脇道も回り道もない難所だった。馭者は威興を出発した時の馭者ではなく、妹婿と交代していたが、沈着豪放な性格で、「アリラン・アリラン・アラーリヨ　ノーモカランダ…　アリラン・アリラン・アラーリヨ…」と歌いながら牛を誘導していた。検問所に近づくと、頭からかぶせていた藁を除き父を馭者台に座らせ、祖母を寝かせ、枕元に弟と妹を座らせて、祖母を看病しているように見せかけた。私は馭者の横で一緒に歩いていて検問所に入っていくと、馭者は、「アンニョンハムニカ」と大きな声で挨拶をして横の私に小さな声で、「走れ」と言いつて走らせておき、牛車を検問所の前を通り過ぎて荷台が見える所で止めてから、荷台の所に行き、「アンニョンハムニカ」と頭を下

休んで、夜に出ましよう」と、その友だちの家で休憩することになった。

四 過酷な行進と収容所

信頼できると思い込んで私たち一家を友だちの家に連れ込んだ馭者だったが、豪放な性格が災いして私たち一家を奈落の底に突き落とすようなことになるが、それは先のこと知らぬが仏であった。

友だちの家に導かれて行った所は、物置のような板敷きの部屋だった。人が代わればこうも待遇が違ってくるのかと思いつながら、夕方まで時を過ぎしたが、水の一杯も出してくれない。食べ物、永興が出る時に握り飯をたくさん作って持たせてくれたので困らなかつたが、この家では一度も家人が姿を見せないのです、お金を払わないから食べ物を作ってくれないのだろうかと思いつていた。

陽が落ちて出発するという時になって、永興から来た馭者が、「今度は、友だちが国境まで連れて行ってくれる。農業のほかに、運送を仕事にして

げて再びあいさつをした。検問所にはソ連兵が必ずいるはずだが、運良くトイレにでも行ったのか、保安隊員が一人で検問所に立つて警備にあたっていて、朝鮮語でやり取りをしていたが、あとで何をしゃべっていたのかと聞いたら、「お早うございます。母親が急病で病院に連れて行くから、通して欲しい」と言つたと言つていたが、朝鮮人は親を大事にする習慣から、保安隊員は荷台の三人を見ただけで、疑いもなく「行け」と簡単に通してくれたと笑つていた。

元山は、父が威興で店を開くまで、京城の次にわずかな期間だが住んでいた土地だと言つて非常に懐かしがつて、周囲を見渡して藁を頭からかぶるのを怠つていた。そのうちに、前方から牛車を引いてくる馭者に呼び止められた。偶然にも馭者同士が元山農業学校の同級生であったが、相手が見知らぬ日本人を乗せているのに不審に思つて呼び止めたようだ。「ちようど良いところまで友だちに会えた。昼間は暑いし危ないから友だちの家で

いる人で信頼がおける友だちだから大丈夫だ！」と言つた。不安は感じたが、馭者任せだから信じるだけで何もいえないことだ。

今までの馭者は、一睡もせずに一晩中牛を操つて永興から元山まで緊張づくめできたのだから、疲れもあつてやむを得ないことだと思いつ、永興から連れてきてもらった礼を言つて別れた。馭者は私たちが乗つた牛車が見えなくなるまで手を振つて別れを惜しんでいたが、間もなく反対の方向に消えてしまった。

しばらくすると畑の中から保安隊が突然姿を見せて、新しい馭者に何事か言つていたようだが、私たちの乗っている荷台に近づくくなり、「あなた方は日本人ですね。どこからきましたか？」と流暢な日本語で質問をしたあとに、「どうしてこの車に乗っているのですか、おかしいではないか！」と言葉遣いを荒くして再び朝鮮語で馭者に何かどなつていた。次いで「車から降りて、持ち物を全部この上に出して見せてください」と私たちに指

示した。指示されるまま牛車から降りて、ポケットに入れてあるものまで全部牛車の藁の上に置いた。保安隊員は一人一人の体を触って、「何も持っていないことが分かりました。この荷物は我が国の財産であなた方の物ではありません。残念ながらお返しはできませんが、まだ取り調べがありですので、駐屯所まで車のあとからついてきてください」と言った。車に乗せずに、ついてこいと薄情なことを言っ、ポケットから出した小物を一箇所にまとめると、馭者に命じて牛車を動かさせた。

父は何を思ったのか、牛車が動き出すと、急いで手をのばして小さな小物入れの袋を素早く取っていた。私たちは祖母を抱えているので、ついて行くことができずに、見る見るうちに牛車は薄暮の彼方に姿を消していた。彼らは一度も後を振り返ろうとはしなかった。父が素早く手にした小袋の中には、父が命から二番目に大事にしている尺八が二本と、家族の写真に小銭が少し入っていたに過ぎない。父にしては大事な尺八であったが、

畑の中に潜り込んで、直射日光を避けながら体を休め、陽が落ちると歩いたが、少しでも南に行こうとするには、祖母を背負うしかなく、父と交代で背負い頑張った。体力のあるうちは十キロメートル、十五キロメートルと歩いてしたが、畑の根や人参を盗んで食べているようでは体力の消耗が激しくなり、周辺の様子は歩けど歩けど変わらず、少しも進んでいない証拠であった。それでも歩かなければ日本には帰れないと思うと、幼い二人の弟と妹は文句も言わずに黙々と先へ先へと歩いている。毎日が死の訪れを待つようで、希望を失って歩いているに過ぎなかった。やがて歩く元気もなくなつて、一週間も過ぎたころの夜明け前に、祖母を背負って夜通し歩いた疲れと空腹に耐えられず、歩きながら倒れて気絶してしまった。

どのくらいの時間が経ったか分からないが、意識が戻ると、父が一生懸命に揺すっていた。そばに見知らぬ老婆がしゃがみ込んでいて、「どうしたあるか、たくさん日本人死んだ!」と、私の顔

尺八を吹かない私たち子供には糞にも屁にもならない物だった。いずれ孫たちの代には粗大ゴミとなって棄てられることだろうと思うと情けない気持ちになった。一本は父の葬儀の時に棺桶に入れたのがせめてもの慰めであった。父が、母に「船で帰ることは騙されてお金をとられるだけだ」と言っていたが、結果的には父も騙されて身ぐるみはぎ取られたことになった。

このように咸興から持ってきた私たちの全財産は、いとも簡単に取り上げられたが、どう考えても元山で交代した馭者の仕組んだ物取りと思ひ、腑に落ちないことである。これが敗戦国民の宿命だとあきらめなければならぬが、犯人が分かっているから余計に残念だ。

元山から先は祖母を連れた逃避行が続くが、手荷物がないだけに楽であった。しかし老人の足では一晩で一キロメートルか二キロメートルくらいしか歩けないので、話にならない逃避行だった。それも、日中の暑い最中は背の高い玉蜀黍(トウモロコシ)か高粱

を覗き込んで片言の日本語で言った。倒れている場所は、大勢の日本人が私同様に倒れて死んでいた所らしい。幸いに死神から見放されて、息を吹き返した私に次第に元気が出てくると、その老婆が、「腹へって歩けないあるか。めしやる。今持つて来るある。元氣出して歩け」と大きな握り飯を新聞紙に包んで持ってきて食べさせてくれた。道には詳しいと豪語していた父が、道を間違つて金剛山に通じる山道に入っていたらしい。平坦な場所ですえ歩行困難になっている体力が、金剛山など登れる道理がない。それでも私たちは、その山が金剛山に通ずる山とは知らずに歩いていると、前方からライトを照らしながら降りてきた車に捕まった。車による機動作戦を展開していた物取り集団で、車から降りてきた数人の若者が、私たちに持ち物がないことを知り腹を立てて殴り、蹴飛ばそうと身構えた時に、また別のライトで照らし出された。驚いた暴徒は私たちに危害を与えずに逃げ去った。

後から来た車は、ソ連軍と保安隊の合同パトロール隊だった。既に、治安を良くするための移動警察隊が発足していたのだ。パトロール隊に保護されて収容所に入れられたが、どこだか分からない。老人や歩行困難な人たちが二十人くらい収容されていたが、お互いの会話はなかった。収容所の周囲は畑で、折から繁忙期であったのが幸いした。収容されていた三カ月ほどは人手不足で働かせてもらい、賃金の代りに家族分の食糧が与えられ、お陰で私たち一家全員が体力を回復して、生氣を取り戻すことができた。悪いことばかりではなかった。

五 念願の南朝鮮、そして引揚げ

体力が回復し、「明日から稲刈りだよ!」と言われたその早朝だった。収容所の全員に集合命令があり、トラックに乗せられて、名も知らない駅に連れて行かれて無蓋車に乗せられた。しばらくして停車した駅は、山姿や駅の周囲の様子からして、忘れもしない元山であった。

うとした瞬間に、反対側の扉を開けて飛び降り、貨車の下をかくぐり、駅から遠ざかる途中で、巡回しているソ連兵と幾度も鉢合わせをしたが見つからずに恐ろしい思いをしながら、張り巡らされた鉄条網を抜け出たが、その緊張感は生きた心地ではなかった。

駅構内は無事脱出しても、三十八度線までは遠い遠い道のりで、咸興から永興までの距離に等しいが、牛車に乗ったのと徒歩とでは大違いであった。一週間ほど歩いた明け方に、川幅が六十メートルか七十メートルくらいの流れの早い川に突き当たった。三十八度線の国境を流れる川であったが、当然知る由もなかった。「気持ちが良い、身体でも洗おうか!」など呑気なことを言いながら裸になって、体を洗ったり、衣服の洗濯をし乾かしながら、虱取りをしていると、「あなたがたのんきに水浴びや洗濯をしている場所ではありませんよ。この川は南北の国境ですよ。早く向こう岸に渡りなさい」と長い逃避行では出会ったことがなかつ

長い停車時間で、貨車を降りて用便をする人たちが目立った。窮屈な貨車から私たちも降りたが、それはこの貨車が南でなく北の方に向いているので、咸興かあるいはそれ以北に連れて行かれるのではないかと心配になり、相談して南に向いている貨車に乗り換えるためだった。

構内に幾列も停車している列車の下を潜って、機関車が南に向いて連結している貨車に乗ることに成功した。乗車する私たちを待っていたかのよう動き出した。北か南に進むかの大きな賭けと、やけっ腹の気持ちでおこなった行動だった。

列車は私たちの思ったとおり南に進み、途中で電気機関車に切り替えて険しい山坂を進んだ。電気機関車でさえあえぎながら登る険しい道を、祖母を連れて徒歩で登ろうとした無謀さを思い知らされた。下り坂になって停車をした駅で、機関車が再び変わって、次に停車した駅が鉄原であった。

鉄原まで空車で運ばれてきた貨車に、物資を積み込もうとした仲仕が、私たちの貨車の扉を開こ

た懐かしい日本語で、若い人に声を掛けられた。大急ぎで父は祖母を背負い、最初に川を渡り始めた。途中で水に隠れて見えなくなったが、見えた時には祖母を向こう岸に下ろして、こちら側に向かって泳いでいた。戻ってくると、妹に大事な小袋を持たせて背負い、弟を左手で抱いて歩き出し、水深が脛までになると、「しっかりつかまつてるんやで、お前は父さんのあとからついておいで」と私たちに言って、川に入って行った。泳げない私は川底を伝いながら歩いてしたが、どんどん引き離されて、水深が首から口にまで達した時に、とうとう重心を失って流されてしまった。気がついたら父に助けられていたが、幸いにして水を飲んでいなかったので、何事もなかった。

その時突然に、「ダダダダダダ……」と機関銃の音がして水面に雨が降ったような水柱があがった。「怖い!」驚きと同時にみんな必死になって、後の土手を駆け登って避難した。ソ連兵の威嚇射撃だった。ソ連軍は国際協定を犯して射撃した。慌

てふために逃げたが、アメリカ軍は見当たらない。私たちは懸命に歩き続けた。

初めてアメリカの兵隊を見たが、学校で教わった鬼畜でなく、折り目のついたきれいな軍服を着て、腰にも手にも武器は持っておらず、人懐こい顔をして愛嬌がありスマートだった。ソ連兵とは月とスッポンだった。DDTを頭のとっぺんから足の先まで、丁寧に注射器のような大きなポンプでかけられて収容された。このテント村の名前は分からないが、ここに一週間ぐらい収容されてからトラックで京城に連れて行かれ、さらに貨物列車に乗り、釜山に到着した。

追い剥ぎに出会った元山からテント村に保護されるまでの道中が、一番過酷で地獄に向かって突き進むような逃避行だった。

岸壁に停泊している大きな船に乗り込むの時間帯がかかり、到着順のために一番最後になってしまった。船内では、「赤いリングに唇よせて 黙って見ている青い空 リングはなんにもいわないけ

が、次兄の大林清次が南シナ海で戦死した知らせには、大きなショックだった。

乗っている船はアメリカから借り受けた貨物船リバティ号で、台湾・朝鮮間を交互に運行し、この航海が最後で、アメリカに返還すると言っていた。その最後の船で、親子が会えたのは全く幸運だと喜びあった。父の話聞き、私たちの服装を見た船員たちが、手持ちの小遣いや持物を出し合っ、私たち一家を救ってくれた。集まった品物は、信玄袋五個にもなった。袋の中にはお金や米、缶詰、衣類など、生活用品がいっぱい入っていて、内地に帰ればすぐに役立つものばかりであった。

翌朝船は博多港に着いたが、検便やいろいろの手続きに時間がかかり、貨車に乗って博多を発車した時は、既に陽が沈み夜行貨物列車となって、大阪に向かったが、大阪は見渡す限りの焼け野原であった。

六 引き揚げた大阪

父は中之島の兄の家でしばらく厄介になる考え

れど……」と美しい声で面白い歌が流れていた。軍歌ばかり歌っていた私には、リングがかわいいなんて面白いと思っていたら、いつの間にか船全体が「リングの歌」一色になっていた。歌詞が簡単で覚えやすく、そのうえ可愛い女性の声なので、引揚げてきた道中のすさんだ気持ちと和やかになった一時でもあり、何度も何度も船員も引揚者も全員が一緒になって歌った。

流れる曲が切られると、いよいよ数々の思いを残した朝鮮と別れのドラが鳴り、汽笛と共に船はゆっくり岸壁から離れていった。

父は甲板で働く船員に、「安田慧一、大林清次という船乗りを知りませんか？」と聞いて回っていた。すると「あつ、大林君のお父さんですか、お兄さんの慧一君はこの船に乗っていますよ。呼んであげます」と驚いた様子で広い甲板上を走っていった。

しばらくすると、その船員が長兄を連れて戻ってきた。主に父と長兄と船員の三人が話していた

でいたが、家は焼けて跡形もない空き地になっていた。多くの親戚の行く先も分らず、たちまちのうちに定住する家がなくなった。

梅田から中之島・八幡筋と歩き、日本橋から上六へは市電に乗ったが、上六からはまた焼け残った住宅街を、家族が住む部屋を貸してもらえそうな家を探しながら、寺田町まで歩いた。

「戦争中の空襲の恐ろしさを知らない外地の人たちが、帰って来たから空いた部屋を貸して欲しいとは、とんでもない虫の良い話だ。お前たちが帰って来たお陰で、食糧事情が輪をかけて悪くなった。だれが貸してやるものか！」というような朝鮮人でも言わない言葉を平気で浴びせられた。国鉄のガード下も被災者が占拠して、入る余地がない。どこもかしこも、焼け出された人たちでいっぱいだった。外地から帰ってきた私たちには、無情な仕打ちだった。公園の広場も路上生活をしている人たちが満員だったが、たとえ仲間に入っても、船員仲間がカンパしてくれた好意の品々を

盗られるだけではない。朝鮮での略奪の二の舞は避けなければならない。

父は必死になって断られても断られても、家の戸をたたいているうちに、桃谷駅から堂ヶ芝を通りさらに勝山から寺田町の住宅街に入った。「凄く大きな駅だな！」と見とれながら、内地の線路の幅が狭いことに気付いた。また、線路と線路の間に掘建小屋があるのが目に入った。「公園で路上生活をして物盗りに遭うくらいならば、一か八かの勝負だ。今日一日くらいは平気だろう」と、その鉄道構内の小屋に忍び込む考えが浮かんだ。

もしも捕まったときには、「ガード下を黙認するならば、小屋はなぜ駄目なんだと抗議すれば良いのだ」と、鉄条網を張り巡らした駅構内に、入り込む行動を起こした。鉄原駅とは反対に入り込むのだが、監視がなく通行人もないので、鉄条網を掻いくぐって突破した経験と比較すると、簡単だった。小屋の扉は針金を差し込んだだけだった。工事道具の格納に使用していたらしく、入口には

道具を洗う水道が設置されていた。入口の中には、「どうぞご自由にお使いください！」と言わんばかりに、シヤベルとツルハシが吊してあった。また、隅には筵むしろが天井辺りまで高く積まれていた。一日の心算りが二日三日となり、結果、二週間もこの小屋で生活することになったが、電灯線はないが水道の設備があつたので生活には助かった。小屋に入った翌日は、父は念のために和歌山や尼崎、桜の宮と親戚を尋ね歩いた。私は弟を連れて、天王寺駅前の周辺を歩いてタバコの吸殻を拾って集めた。

資本金なしで一儲けをたくらんだ、見栄も過去の育ちも捨てての吸殻拾いであつた。今で言うホームレス、当時は乞食と言っていたが、家がない子は就職もできないので、仕方がなかった。

公園や焼け跡の中での生活でなく、電車が頻繁に通る危険な鉄道敷地内での生活だったので、物盗りの心配がなかった。

夕方に疲れた顔をした父が「紀州の家も慧一が

言っていたようにあらへんかったわ」と言って帰ってきたが、私たちが拾ってきた吸殻が広げられているのを見て、「なんや、こんなもん集めてきよって、どないする積もりや」と言うので、「差し当たってお金を作らないと動きが取れないので、落ちている吸殻を拾ってきた。ただで拾ってきたから売ると儲かるよ。これだけ集めるのも、拾う人が多くて大変だったんだよ。巻き直す紙は父さんが買ってきて欲しいのだ」と言うと、「そらあかんで。こんなもの巻き直して売ったら、モムのう二度と売れへんようになるで。お前がほんまに売る気なら、闇市で葉タバコをこうてきて巻いた方が、よう売れるで。わしがうまいタバコを作つてやるわ!」と言って、祖母だけを残して全員が新世界の闇市に出かけた。

闇市で葉タバコやサツカリン・英語の辞書と、生活に必要な品々を購入して小屋に戻り、父がタバコを巻いて作ってくれた。葉タバコに、サツカリンを溶かして霧状に振りかけて甘味を出し、英

語の辞書で巻いたのが当たって、一度買った人は私を探してまで買うようになった。

しかしこれは長続きしなかった。路上で物を売るには、土地の顔役の許可をもらい、場所代を払わなければ商売ができなかったのだ。その配下のタバコ売りの少年や、靴磨きの少年に袋たたきに遭った。天下の公道でも、自由に物を売ることができないのを知った。それでもタバコを売らなければ、作ったタバコが無駄になるばかりか、家族が食べて行けなくなる責任を感じて、翌日からは天王寺駅前止めて大阪駅前に場所代えをし、時間を限定して靴磨き、手製の蒸しパン売りや傷痕軍人たちが現れる朝の八時までに商売をした。

だがタバコが売れる喜びはいつまでもは続かず、天王寺駅に無断で侵入して小屋を不法占拠していたのが発覚して、阿倍野警察署に保護されてしまった。刑務所行きだと脅かされて取調べを受けたが、引揚者としての事情や鉄道の運行に支障をきたしたわけでもないの、身元引受人さえいれば

釈放してくれることになった。困っていると、警察で土地の名士で民生委員である人に連絡をして、警察に来てもらった。警察署に駆けつけてきた民生委員は、父の顔を見るなり、「おっ、安っさんではないか？ どないしたんや。えらく人騒がせをして……」と抱きついて再会を喜んだ。「地獄に仏」とはこのことだろうか、警察官も驚いていたが私も父の知り合いと知って、沈んでいた気持ちが一瞬に明るくなった。

引揚船で兄と再会した幸運が、大阪まで持続していたのか、父が商売をしていた楽器の製造卸売りをしていた会社の社長であったその人は、戦局が激しくなり楽器製造が困難になったとき、工場を飛行機部品や弾丸などの軍需品の製造に切り替えることにし、工場を手放して、阿倍野に新天地を求めて暮らしているうちに終戦を迎え、幸いに戦災に遭わなかったので、資金を豊富に持っていた。その資金で寺田町駅周辺の住宅や不動産を格安で手に入れて、旅館業を営みさらにその近くで

楽器製造の技術を生かして木型工場を作り、また寺田駅前には八百屋を開いて、二番目の息子に継がせていた。本人は無尽講の責任者に収まると共に町内会の会長となり、民生委員も引き受けて寺田町周辺の名士になり、警察にも顔が知れるようになっていた。

警察署から引きとられた私たち一家は、木型工場の二階の未使用の宿直室に入れてもらった。翌日、父と一緒に引揚証明書を書き出して提出して日本国民として認定され、米穀配給手帳や衣料切符などの交付を受けた。弟と妹の二人は、近くの高松小学校に一年生と四年生として入学が認められて、学校に通学できるようになった。しかし私は「義務教育が終わっているのに、今の生活を考えてお父さんを助けるために働きなさい」と突き放された。仕方なくそのままタバコの販売を続けて、家計を助けた。父は三味線の修理技術を持っていたので、細かい仕事ができる木型の仕事を手伝うようになった。

私は大阪駅に行く電車の中で、担ぎ屋の小母さんと知り合い、二度ばかりタバコ売りが終わると、小母さんが西宮・芦屋の高級住宅地に、注文の品物を届けて帰る時間を待ち合わせて、農家に行き、天下ご法度のやみ米を分けてもらって、我が家の主食の足しにした。担ぎ屋の小母さんは得意先がたくさんあると見えて、毎日電車に大きな荷物を背負って乗っていた。私も欲が出て、タバコの販売を終えた八時過ぎから時間があるので、毎日買出しをするようになった。タバコと違って仕入れる金額が大きいので、売れ残ると木型工場の二階に持ち込むようになった。タバコの販売はならず者の、米の販売は警察の目を盗んでする仕事なので、どちらも良くはなかったが、当時の人たちはどちらにも必需品で、特に米はほとんどの人が自家消費のために買い出しに出かけていた。それで、その売れ残って持ち帰った米を、父が「お世話になつてるので、たまには分けてあげなさい」と言って、大家にお世話になつてはいる気持ちだけの

お礼だといって持って行った。だが、このことが仇になるとは思ってもいなかった。土地の名士も米には勝てずに、営業している旅館の食事を、政府発行の外食券を持たずに宿泊している人にも提供したいという営業欲が出て、米を売る農家を知っているなら、紹介してもらいたいと頭を下げてきた。世話のなりっぱなしになっていて、何かでお返ししなくてはならないと父と話し合っていたところであったので、恩返しのため米を買に行くようになった。

買出しが一週間も続いたところに、「警察の目を盗んで米を買いに行くのは、神経を使うだろうし重いだろうから、息子にバタバタ（オート三輪車のこと）で買いに行かせるから、農家を紹介してもらいたい」と言ってきた。別に、米を運ぶだけで一銭の利益を得ているわけではなかったので、喜んで小母さんを紹介したら、小母さんもその方が安心だからよいだろうとなった。私を抜きにして、直接取引を開始した。私には、「路上で商売をす

ることは、不良になる足がかりだから、一日も早くタバコの販売を止めて、将来困らないように手に職をつけなさい」と言っていて、福島区鷺洲の鋳物工場を紹介してくれた。

鋳物工場では、朝から夕方まで金網に土を入れて不純物を取り除く「土振るい」の仕事であった。極度に環境が変わったうえに、タバコの販売をしていたころと違って、日銭が入ってこなくなり、小遣いにも事欠くようになり、少しでも増やしていた貯金ができなくなった。

勤めてもお金がたまらなければ、住まいも代わらず学校にも行けない。一カ月が過ぎて、給料をもらってみて驚いた。タバコを売っていたときの一日分の金額であった。そこで、再び早朝のタバコ売りを再開して、一足の草鞋を履くことにした。結局両立するわけがなく、遅刻が頻繁に起きて、社長に注意をされたのを恨み、だれにも相談せずに鋳物工場を辞めてしまった。すぐにそのことが父の耳に入り、父は烈火のごとく怒ったが、紹介

それで知ったある学校の購買部に行って、教科書を買ってきて勉強をしていたが、その勉強がまた認められ、「将来の幹部を目指せ」といって、その学校に編入させてくれた。

同じころに木型工場の二階から、阿倍野筋一丁目のアパートに転居した。学校に通い出すと、大親分のそばには行けなくなり、繁華街で経営するダンスホールのドーボーイとして行かされた。

この大親分は老齢なので別の親分がいて、大親分の縄張りを代行して守っていた。学校では、武器を持たずに相手の攻撃を避けて一撃のもとに倒す空手部に所属して、拳を磨いた。経営者が組織の親分であるので、ドーボーイの仕事を中心に、人手がない時はパチンコ店の裏方までさせられた。このころ、船員の長兄が三年間働いた給料を持って私たちを探しさがして訪ねてきた。船に乗っている期間はお金の使いようがないために、親会社が船に乗っている期間中の給料を預かっていて、危険手当もついていたので、普通のサラリーマン

をしてくれた大家は、「仕事が性格に合わなかったのでしょう」と、心の大きいところを見せていた。私はそのままタバコの販売を続けたが、昼間の余った時間を有効に使いたいと考えて、ふとしたことから知り合った靴磨きの少年の紹介で、家族が一番恐れていたならず者の組織に入った。組織に入って間もなく、そのころ寝た切りだった祖母が永眠した。

世が世であれば立派な葬儀をしてもらえた祖母であるが、人様の工場の二階で生活をしている私たちでは、葬儀代にお金をかける余裕もなく、火葬が終わると、近くの宗派も違う無縁仏の一心寺に納骨してしまった。いずれ大仏となって、世に姿を現してくれるだろうと祈った。

靴磨きとタバコの販売を二股かけて頑張っていたが、組織の大親分の目に止まり、走り使いの小僧として雇われた。ただそばにいるだけで、用事を言われたら買物に走ったり、お茶を汲むくらいの仕事だけで、用がない時は新聞広告を見ていた。

の三倍はあった。その三年分であるから、家の一軒も購入できる大金だ。そのために長兄は威勢が良くて、「なんだ。こんな薄汚いアパートに住んで、お前は父さんの手助けをしていたのか。学校に行く金があるなら、もう少しましな部屋に住んだらどうなんだ」と言って私をののしり、揚句の果ては、「出て行け」と追い出されてしまった。小さい時から目の敵にされていたので、兄の言葉に逆らえなかった。

家を飛び出した私は、学校に近い天六の農家の玄関先にある、来客用の持物置の二畳の部屋を借りて、独身生活を始めた。

やがて対立していた暴力団同士の抗争が起きて、組織の勝利に私は貢献したが、警察などの手入れを受けた組織の本部は、幹部連中が根こそぎ逮捕された。大親分は逮捕を免れたが、信頼していた親分や幹部連中が警察に拘束されると、急に体に異常をきたして帰らぬ人となってしまった。私は大親分の死で自由な身になれたと喜び、ダンスホ

ールを無断で退社した。空手の道場がその分校にあったので、分校によく通っていた。正門前に、小さな町工場が半紙にアルバイト学生を求めるチラシを玄関に貼り出しているのを見て応募した。

タバコの販売も靴磨きの仕事もできなくなり、収入が途絶え焦りもあって、学校の正門前にあった町工場にアルバイトで入った。お金がもらえる所だったらどこでもよかった。ここはベークライトの加工工場で、職人が工場長以下五人、そして責任者を入れて三人の営業社員という合資会社だった。電話番号と労務加配米の分配、厚生年金、健康保険、失業保険、給料計算などの仕事をしたが、一カ月もすると嫌気がさして薬問屋の配達に変わった。しかしタバコの路上販売の旨味が忘れられず、真夏の暑い気候に合わせてアイスクャンデーの行商を始めたが、これは儲かった。アイスクャンデーの時期が過ぎると、親しくなった薬問屋の人から駆虫薬を卸してもらい、府下の小学校を対象に言葉巧みに売り歩いた。当時、児童は食糧事

情が悪く、寄生虫を体内に宿していたので、校長先生は渡りに船とばかりに取り上げてくれて、よく売れた。

悪巧みをする人間が成功した時代であった。巨額の富を得た私は、ここで学生に戻って真面目に生活をすれば良いものを、欲の皮が突っぱりインチキ新聞を発行した。広告料が目当ての商売で、これもうまくいったが、所属していた組織に見付かって財産を一切合切没収されて大阪を追われた。またも裸一貫となってしまうたが、小倉で開催された競輪に目をつけて、忘れていた母を探す決心をした。ばくち打ちに成り下がりがら、九州、四国、中国と選手を追いかける旅が始まった。一文無しになるとキセル乗車をしたり、寺の軒下で寝ることもたびたびあった。母の出生地で幼馴染の人たちに巡りあえたが、母とはどうしても再会できなかった。

いつまでもかけ事で人生を送っていると、本当に世捨て人になってしまう。何もかも忘れて一か

らやり直そうと考え、大阪にはもう戻れない。それではいっそのこと東京に行こう。真面目に暮らせる所は、過去さえ忘れ去れば東京が一番だ、と東京に出た。既に二十六歳になっていた。石原裕次郎の人気絶頂期で、南極大陸に越冬隊が上陸したり、「君の名は」の放送中の銭湯が、がら空きになる年だった。

東京は全国各地から上京してきた人たちが多く、大阪以上に厳しい世界であった。住所不定と身元不明が最大のネックになって、だれも見向きもしてくれない。やっぱり駄目であったか？「若い時に技術を身につけておけば、将来に役立つ。タバコの販売はお辞めなさい。ズルズルと落ち込むだけだ。後悔する時が必ず来る」と恩人が言っていた言葉がよみがえった。人生の良い時は考えもしなかったことが、落ちこぼれると不思議に湧いてきた。しかし、先立つお金があまりない。後楽園では競輪が開催されていたので、手持ちのお金を増やそうか、とも思ったが、しかし「駄目

だ、賭け事を止めるために東京に出てきたのではない。誘惑に負けるな！頑張るんだ」と自分に言いきかせて、会社が駄目なら個人の商店だつて働く所はある、と思いついた。そうだ商店だ、商売屋が良い。パン屋、酒屋、八百屋、魚屋、何だつてある。商店なら、住み込みで働ければ住居と食事の心配はなさそうだ、とずる賢い考えが浮かびあがった。

地下鉄の終点渋谷駅が地上にあるのを驚きながら、国鉄のガード下を歩いていると、炎天下に半ズボンで、上半身裸で真つ黒に日焼けした肌を、腹だけ真つ白な晒さらしを巻いたスタイルで、ねじり鉢巻の四十過ぎの氷の配達人が目に入った。自転車にリヤカーを連結させて、氷を山のように積み菰をかぶせているが、暑さのために積み込んでいる氷が解けて、地面一帯は水浸しである。考えもしなかった私に、最適な職業が目飛び込んできたので、「氷屋さん、人手はいりませんか」と思わず声をかけたが、「今忙しいのだ。話している余裕が

ない。この広い通りを真つ直ぐ行くと、途中に東郷神社がある。その神社の前に原宿に出る道があるので、その道に沿って行くと、角から二、三軒先にラーメン屋があるから、ラーメンでも食って待っておれ、すぐに帰るから話はそれからだ」と、乱暴な言葉であったが返事があつた。

教えられた通りにラーメン屋に行くと、ラーメンのれんが下がり、テーブルや椅子が並べられていたが、店の奥まった所に大きな冷蔵庫（氷室）があつて、二、三人の若い衆が、言葉を交わした配達人と同じスタイルで、自転車にリヤカーを連結して氷を積み込んでいた。渋谷は飲食店が多いので、大口の十二貫目、半分の六貫目はすぐになくなり、ピストン輸送のごとく戻ってきてはまた積み込んでいた。間もなく言葉を交わした人が帰ってくる、氷の配達は大変なんだよ。モタモタしている、水になってしまふからな。本当にやる気があるなら、ここへ電話をしておくから行きなさい。私の親父の番頭が新たに店を出して、人を

人手不足であつたので、立ち会つた女将が詳しい身元調査もせず、すぐその場で採用してくれた。配達から戻った主人には「渋谷の店からよこした人だから、大丈夫だと思つて働いてもらうことにした」と言つて説明したが、「分かつた。それでは着替えて一緒に来なさい。かあちゃん、私の半ズボンを貸してあげなさい」と言うなり自分は室を開けて氷を出して、切つてリヤカーに積み込んでいた。借りたランニングシャツに半ズボン姿になつた。「氷は初めて扱ふのだろう。氷にも材木のように目があつて、目に逆らうと綺麗に切れない。このようにするのだ」と、鉄の使い方からノコギリの使い方まで丁寧に教えてくれ、リヤカーに積み終わると、「さあ、出かけよう。明日から頼みますよ。よく覚えておいてくださいよ」と、リヤカーを自分で引っぱりかけたので、「僕が引きます」と主人に代わつた。すると、簡単に引いているようであつたが、重くて動かない。「力ばかり入れても駄目だよ。こうすれば楽に動くよ」とり

欲しがっているので行つてくれないか」姿恰好とは全く違つて温厚な話し方で、荒くれ男を自由に使う人のように見えなかつたが、その人は氷屋の若主人だつた。

訪ねた先は都電の麹町二丁目の停留所近くで、渋谷の店に比べると新しくきれいな店だつた。

店舗を構えて二年そこそこの新しい店は、麹町一帯の住宅地を専門に、夏だけ氷を販売して冬は開店休業状態となり、病人用の氷とか臨時の客だけを扱つていたが、よその氷屋は冬は必ず燃料を扱つていたが、この店の主人は既に五十歳を過ぎっており、夫婦二人の生活分だけを稼げばよいとのことだつた。

「木炭や石炭を扱ふと、せつかくきれいにしている店が汚れて不潔だ」と頑固なところもあつて、使用人を遊ばせていた。東條会館やダイヤモンドホテルなど、大口の配達先もあつたが、大部分の得意先は、一貫目二貫目と小さく切る家庭用の冷蔵庫であつた。

ヤカーの引き方まで教わつた。

行く先は、麹町二丁目と一丁目方面であつた。最初につまづいたのが、都電の線路を横断する時だ。軌道部分がわずかばかり高くなつていて、氷を積み込んだ新米の氷配達人には渡れない。「大丈夫かね！」と言われてうしろから押しもらった、どうにか渡り切れた。

麹町二丁目の住宅地は、平地で配達がやりやすいが、麹町警察署の裏からイギリス大使館裏の急坂は、氷の重みで自転車のブレーキでは止まらない。坂の中途には大口のジャーマンベーカーがあつて、どうしても氷を運ばなければならぬお得意さんだ。それで警察裏でリヤカーを自転車から離して、自転車で主人と二人で運んでいた。一人になると、当然二度から三度も往復することになる、慣れてくると若さのあまり連結したまま坂を降りて、止まり切れずに通行する車に接触したり、ぶつかりそうになつたりして警察で叱られてばかりいた。

主人と一緒にときは、売上げの計算はしなくても済んだが、一人で配達するようになると、その日の配達記録と売上げを女将さんに提出するのが大事な仕事であった。運び出した水と売上げが一致しなければならぬので、苦勞の連続だった。水は水の塊であるから、最初の家庭は正確に近い目方で届けられるが、最後の家になると小さくなって、同じ代金はもらい難い。しかし小さくなつたからといって安くすると、金額が合わなくなるので苦勞をした。値引きは強く禁じられていたが、最後の家は気の毒であった。

私の受持区域は電車通りの前側だったが、店の裏側は隼町、平河町と続き、その先は国会議事堂で、初めて見る議事堂には感無量であったが、思いがけなくも、議事堂内に水を搬入するようになった。衆議院議員食堂から職員食堂、参議院議員食堂、職員食堂と販路が広がり、真夏には議員控室や各議員事務所にまで配達するようになった。

「裸の筋肉隆々の逞しい氷屋さん」ということ

落ちついてきて、テレビや電気冷蔵庫が出始めたので、氷屋も限界だと悟り、私は虎ノ門の会社に就職して今日に至り、主人夫妻も店を畳んで千駄ヶ谷に引越し余生を過ごしていたが、今は亡き人となってしまった。

父とは、兄に追い出されてから一度も会えず、葬儀の日だけ弔いに大阪に行ったが、成人した妹弟も大阪を離れるのは嫌だということでそのまま別れて、東と西の生活となった。兄とは喧嘩をしたままで、死んだことも知らなかった。弟は兄弟仲の悪かったことを見て知っていたので、私には知らせず弔いを済ませた。四国の親戚から、探した母の生存を知り再会したが、母の第一声は「迷惑な！ だれが探して欲しいと頼んだ」だった。自分の失踪を棚に上げて、一生懸命に探した子供の心も知らないで、迷惑だと言われた言葉が悔しくて、「子供の人生を変えたのは誰だ」と口に出かかったが、さすがに言えなかった。母も変わったが、これでは一緒に生活したら妻がかわい

で、議事堂内に勤める女の子には有名になった。それが縁でさらに総理府食堂、首相官邸の記者クラブまで足を延ばしていた。当然リヤカーでは間にあわないので、オート三輪で配達をするまでの大きな氷屋になっていた。販路を広げるために、赤坂プリンスホテル、建設中のホテルニュージャパンや四谷見附の主婦会館に日参して、次々に願いが叶っていた。千代田区役所麹町出張所にも出入りするようになり、係りの人もねんごろになった。「転出届けがなく、住民届ができない」と日ごろ思い悩んでいたことから、それまでの人生経験を打ち明けると、「私が大阪の区役所と連絡を取って、あなたの戸籍をこちらに移動してあげる」と親切に手続きをして、私だけが家族から分家したようにして、本籍も住所も東京都千代田区麹町二丁目……となった。住居は変わったが、本籍地は麹町のまま現在も続いている。

この氷屋のご夫婦のお陰で、私の人生は立直り、現在の妻とも一緒になることができた。世の中も

そうだ。無責任な言葉を吐く母親だ。東京の生活は嫌だと言っていた妹は、母と一緒にならんと、喜んで大阪から出てきて生活をしていた。母も、今はあの世で父と仲良くしていることを願っている。

あとがき

体験を顧みると、片親がない子供、家庭がしっかりしない、放つたらかしの子供が悪の世界に足を突っ込み、気がついた時には抜き差しができないようになっていく。母さえそばにいてくれたら、私の人生も大きく変わっていただろう。今こうしておられるのは、意志が強く何事にも負けず、幸運に恵まれて、多くの方々がお世話してくださったお陰だと感謝している。

昭和初期に生まれた人は、大なり小なりだれしもが苦勞するために生まれてきたと諦め、今日の日本の基礎を作ったと考えるより他に表現の方法がない。

子供孫次代を背負う人たちのためにも、戦争は二度としてもらいたくないと願うだけである。